

巻 頭 言

専門日本語教育研究推進の流れ

専門日本語教育学会長

古 城 紀 雄

(大阪大学留学生センター長)

日本語によるコミュニケーション能力が外国人留学生及び研究者に必要な状況は、英語での研究指導などがかなり整備されつつある今日であっても、依然として変わっていない。加えて、学部や大学院博士前期課程での講義の大半が日本語で行われており、また、指導教員の一部が英語に堪能であっても、研究室構成員との協働や毎日の生活には日本語能力が必須であることは現実である。その際必要とされるのは、本学会と深くかかわる「専門日本語」能力までに及ぶ。

いささか古い調査となるが、1990年に大阪大学に学ぶ留学生を対象に「今、どのような日本語力を養成したいか」を問うアンケート調査を実施した結果では、「論文・レポートを書く」能力を向上させたいとの回答が圧倒的多数を占めた。一方、指導教員対象の（大学での）日本語教育に期待する内容の調査によると、極めて専門性の高い語彙・用語はともかく、日常用語よりは学術的内容を含む言葉を使つての（1）「作文（論文作成）の基礎と演習」（2）「口頭発表で用いる基本的表現と活用」への要望が極めて強い結果として示された。

すなわち、留学生・指導教員ともに、「話す（コミュニケーション）」能力を基本としつつ、併せて、研究留学生においては特に、自分が専門とする分野での研究遂行の過程で「書く」能力の錬成を要請しているとまとめることができる。研究遂行上、専門用語・表現を用いた作文教育が留学生および指導教員双方からことに待望されているわけである。

このようなおもに上級者を対象とした専門日本語教育については、ここ20年弱の間、特に理工系留学生対象の当該教育を中心に、大阪大学、筑波大学及び東京農工大学での協議会を通じて研究協議が重ねられてきた。大阪大学の場合、工学部において留学生センター設置前の1991年より最終的には日本語でレポート・論文を書く能力養成を目指した一連の補講教育が当時の文部省特別経費の配分を受けて開講されており、このプログラムをサポートする意味もあって、「専門日本語教育の今後の展開」、「専門日本語教育の具体化へ向けて」、「専門日本語教育の最前線」、「専門日本語教育の具体化と課題」などを主題とした協議会が開催されてきた。筑波大学では国際学術研究とも連携しておもに米国の科学技術日本語教育を直接討論材料として、日本の当該教育のありようについて有益な示唆を提供し、東京農工大はまさに理系学部のみで構成されている特徴を活かし、指導教員と緊密に連携しつつ補講授業を充実させた。また、これらに加えて東京工業大学においても同様の立場から先進的に理工系日本語教育を体系化している。また、ここでは部局で自然発生的に開始された専門教員と日本語教員の連携による授業試行もあり、今日の専門日本語教育に活かされている。その他、多くの大学において文系も含めて積極的に専門分野の語彙・文法、種々の表現の指導に配慮した教育がなされてきた。

日本語に限らず、学習される言語は、あくまで学習者がそれぞれの目的を達成するために必要とする「手段」であると考えられる。このことは日本に学ぶ留学生のみならずにとっては至極当然なことで、学んだ日本語でもってそれぞれが極めようとする専門分野の学習、研究にいそしむことになる。しかし、このことのために必要な専門日本語教育の分野における教材開発や教授法の詳細にわたっての研究は、まだまだ歴史も浅く、必ずしも活発とは言えない状況と判断されている。

以上、大学における留学生への教育を例として専門日本語教育について言及してきたが、専門日本語教育学会は、大学に学ぶ留学生のみならず、その他、特定の目的を持った日本語学習者を対象とした専門日本語教育にも高い関心を持っている。今日では、日本あるいは海外の関係機関で学ぶ日本語学習者や研修生、日本の関連企業等で日本語を用いて働くビジネスパーソンなど、実に多様な日本語学習者を対象とした専門日本語教育が求められているものの、十分には行われていないという現状が指摘されている。そういった専門日本語教育の充実と発展のためには、それぞれの専門日本語が必要とされる現場や環境などに関する地道な研究、及び関係者との情報交換や連携体制の構築が極めて重要であると言える。本学会が今後も多様な専門日本語教育の研究を推進し、多くの関係者との貴重な研究交流の場を提供できることを心から願っている。

最後に、専門日本語教育学会は、まだまだ若くて少人数の学会ではあるが、研究討論会での活発な議論の上に、学会誌「専門日本語教育研究」への投稿論文の極めて丁寧な査読プロセスを通じた交流が一人一人仲間を増やしつつある。会員は、多彩なバックグラウンドを持つ日本語教育関係者に加えて種々の専門分野の教育研究者の参加が増加傾向にあり、また、本会の学会誌に掲載された論文にはますます高い評価を得ている。査読論文を印刷公表することが研究するということであり、それへの機会提供こそ学会の使命であるとの方針も確認した上で、ここ 20 年弱の流れを意識しつつ、ともども、地道にこの「専門日本語教育学会」の発展を期したいものである。

